

5月第2週の礼拝 説教

■日 時：2022年5月8日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「見なさい、あなたの母です。」

■聖 書：ヨハネによる福音書 第19章25節－27節

本日は5月の第2日曜で、日本でも母の日として覚えられています。20世紀の初めごろに、アメリカの教会から始まった5月の第2日曜日を母の日として祝うという風習が、20世紀の半ばの第二次世界大戦後に日本にも伝わってきて日本全国に普及していった、というのがその由来のようです。先週あたりから、街中では、カーネーションの花束や鉢植えがたくさん売られています。では聖書の中では、どのような形で「母」が語られているかをご一緒に考えてみたいと思います。もちろん、最も有名なのは、クリスマスの時期になると必ず取り上げられる主イエスの母マリアです。そして、先ほど読んでいただいたヨハネによる福音書19章25節から27節にも、主イエスの母が登場しています。

さて、本日の箇所ヨハネによる福音書19章25節には、「**イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた**」と記されています。そして、ヨハネによる福音書だけが、主イエスの十字架のそばに、四人の女性たちと「愛する弟子」と呼ばれる特別な弟子が立っていたことを記しています。他の福音書には、女性たちが主イエスの十字架を遠くから見ていたとありますが、ヨハネは、十字架のそば、つまり十字架の真下にこの女性たちがいたと語っているのです。また「愛する弟子」がそこにいたと語っているのもヨハネのみです。この弟子は最後の晩餐の場面から登場している、ヨハネ福音書に特徴的な人物です。他の福音書では、主イエスの十字架の場面に弟子たちは全く出て来ませんが、ヨハネだけは、この弟子が十字架の真下にいて、主イエスから語りかけられているのです。26節、27節を読みますと、十字架の上で死に臨んでおられる主イエスが、まず語りかけたのは「**その母**」つまり主イエスの母でした。母に、「**婦人よ、御覧なさい。あなたの子です**」と語りかけたのです。そしてその傍にいた「愛する弟子」にも「**見なさい。あなたの母です。**」と語りかけたのです。「**そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った**」とあります。この話を単純に読めば、十字架の死を目前にした主イエスが、遺していく自分の母に、「**これからはこの弟子をあなたの子と思って頼りなさい**」と語りかけ、その弟子には「**これからは私のこの個所は母をあなたの母として面倒を見てやってほしい**」と託した、ということになります。ですから、この個所を、死に臨んで母親のこれからのことを心配しておられる主イエスのや

さしさが描かれている、というふうにも読むこともできるのです。しかし、ヨハネによる福音書の著者は、この話をそのような美談として語っているわけではありません。そのことは、「婦人よ」という呼びかけから分かります。母親に向かって、なぜ「お母さん」と言わないのでしょうか。私たちの常識から考えても何か変だな、とひっかかりを感じさせられることでしょう。そのようなところにこそ、聖書をもっと深く読んでみようと私たちを導く深い意味があるのです。

そして、これと同じことはヨハネによる福音書の第2章の、ガリラヤのカナでの婚礼の場面でも記されています。そこにも主イエスの母が登場していますが、主イエスは2章4節で母に、「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と言ったのです。これも「婦人よ」という呼びかけです。しかも、ここで主イエスは母に、「わたしとどんなかかわりがあるのです」と言っておられます。母親に向かって、あなたと私は関係がない、と言っているのです。これは「婦人よ」以上にひどい言葉だと言わなければならないでしょう。実は、この箇所と本日の箇所とは繋がっているのです。両方を繋げて読むことによって初めて、この二つの話の、そして主イエスの不可解な言葉の意味が見えてくるのです。

2章4節において大事なのは「わたしの時はまだ来ていません」という言葉です。それならば、本日の聖書箇所でも記されている十字架の出来事が起こっている「主イエスの時」が来たなら、そのかかわりが生まれるということです。つまり、「主イエスの時」とは十字架の死においてやって来るということが、ヨハネによる福音書全体を貫いている大切なメッセージです。主イエスが十字架にかかって死ぬことによって神から託された救いのみ業を成し遂げる時です。今やその時が来ている十字架上で、主イエスが「婦人よ」と呼びかけ、愛する弟子に「見なさい。あなたの母です。」と呼びかけるところに、まったく新しい「母と子」のかかわりが生まれるのです。そしてこの弟子こそ、この福音書を書いたとされるヨハネではないかと言われていました。しかし、主イエ스에愛された弟子は決してヨハネだけではありません。ヨハネによる福音書13章の1節には「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」とあります。弟子たちは皆、主イエスによってこの上なく愛し抜かれた人たちだった、ということをもヨハネ福音書は語っているのです。その弟子たちの代表が「愛する弟子」なのであり、今ここに礼拝をささげている私たちみんなの代表でもあるのです。その愛する弟子に十字架の上の主イエスから新しい形での「母」が指し示され与えられるそれが、「見なさい、あなたの母です。」という言葉に表されているのです。それは、血縁関係がないけれども主イエスによって示された、そういう人を母として生きてい

きなさいということでもあるのです。そして、その愛する弟子は「イエスの母を自分の家に引き取った」のです。

キリスト教会においては、「父なる神様」「母なる教会」という呼び方をすることがあります。私たちが今日、この礼拝において「母の日」について考えたのですから、私たちの中にもまた、主イエスから指し示された新しい形での「母」が与えられたということになります。そうすると、そこでは何が起こっているかということ、お互いに主イエスから示されて呼び集められた新しい家族の形ができているということになります。それは、血縁関係によらないイエス様を中心とした母と子の関係や兄弟姉妹という関係ができているということになります。その中では、お互いに尊重しあいながら、祈りあいながら、父なる神様を共にあがめていくという新しい営みがなされているということにもなります。そのことを深く覚えながら、この1週間を過ごしてまいりましょう。